モンスターハンター 砂海の狩人

stringHz

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター 砂海の狩人

【Nコード】

N2767J

【作者名】

stringHz

【あらすじ】

初心者ハンターのファムは、ドンドルマでは上手くいかずにロッククラックへ出向くことになる。

ここに腰をすえようとするためにハンターの手続きをしようとしたところ、ケアルと出会う。

ギルドマスターの誘いにより、2人が一緒に組むことになった。

またその後、2人は1人の少女とであう。

ハンターとしての能力が高そうでないと言姿から読み取るも、以外にも力量はファム以上で・・・

そんな3人が狩猟をこなす、ただ1つのパーティーの物語です。

キャラクター紹介&あらすじ

キャラクター紹介

ファム（17歳・）

使用武器：大剣

ドンドルマ出身の青年。ドンドルマでは狩猟が上手いかなかったために、

ロククラックへと出向くことに。見たことが無い狩猟場やモンスターに期待感を膨らませている。

ケアル（17歳・）

使用武器：太刀&ボウガン

ミナガルデ出身の青年。新しい発見と、自分の能力の向上のためロククラックへ向かう。

ここでファムに突然出会うこととなる。

シャルク（18歳・）

使用武器：片手剣&ボウガン

モガの村出身の少女。ロククラックと村を行き来して依頼をこなしている。

ファム・ケアルよりも上級者だが、容姿などからはとてもそうは思えないほど。

あらすじ

初心者ハンターのファムは、ドンドルマでは上手いかわずにロククラックへ出向くことになる。

ここに腰をすえようとするためにハンターの手続きをしようとした

ところ、ケアルと出会う。

ギルドマスターの誘いにより、2人が一緒に組むことになった。

さらにその後2人は、1人の少女とであう。

ハンターとしての能力が高そうでないと言姿から読み取るも、以外にも力量はファム以上で・・・

そんな3人が狩猟をこなす、ただ1つのパーティーの物語です。

プロローグ

陽は既に昇っていたはずなのに、この部屋はとても寒かった。

家には所々穴も開いており、そこからビュウビュウと冷たい風が入ってくる。

家には机と布団、そしてハンターに必要な最低限の物しかおいていなかった。

「うう・・・寒い」

そこで寝ていた1人の青年、ファムは布団を2枚かけていながらもブルブルと震えていた。

ファムには共に狩りをする者がいなかった。それはただ単に自分1人で狩猟をしたいという一心なわけでもなく、ただ単に、組んでくれる者がいない。ただそれだけだった。

1人で組めば当然リスクは大きい。道具の消費量、ダメージ、効率が4人で狩りをしたときと全く違う。

ファムは初心者で、まだイヤンクックを辛うじてを狩ることができない力量だった。

ファムは起き上がると、武具を装備してすぐに家を出て行った。

武器は大剣。ギアノス素材から派生させ、ランポス素材を利用して作る蛇剣【大蛇】を使っていた。

防具は最近やつとの思いで新調したクックシリーズを身にまとっていた。

ファムの向かった先は、石造りの大きな建物だった。ファムの家よりもかなり暖かく、家にいるように断然ここに居た方が快適である。そこに居る人たちのほとんどは、頑丈な防具を身にまとうハンター達で、狩りを終えたハンターは祝福を、狩りをしようとするハンター達はカウンターにいる受付嬢のところまでクエストを受注している。そこにあるものは、美味しそうな食事や飲み物、ハンターに必要な地図やモンスターに関わる情報、依頼が張り出されている掲示板の

みである。

その酒場にファミは姿を現す。朝食はパンが2つ、だけだった。

「はあ。たまにはちゃんとした食事をとらないとなあ」

と呟く。度重なる依頼の失敗で所持金はほぼ無い。住む貸家も所持金に応じて引越すハメになり、もうこれ以上お金が無くなるとホームレス生活になってしまうほどの危機である。

小さい頃に父親を亡くし、その意志を継ごうと決心したのもつかの間、最初から大きな壁にぶち当たっていた。

そんなファミは、1つのことを考えていた。それは数日前のことである。

『ロックラック、ハンター募集中。初心者も上級者も大歓迎』

という張り紙が酒場にあったのを見かけたのだ。ドンドルマはハンターの数が尋常で無い程。もっと言えばあまるほどいるため、依頼を受けることが出来ないハンターや、パーティを組めないハンターが当然でてくるのだ。

しかし、このハンターの数が少ないらしいロックラックへと出向けば、そこへ来た者と共にパーティを組む事だって可能だ。当然何の狩猟経験も無い新米ハンターだって現れることだろう。

昨日、ファミは図書館へと出向き、ロックラックの地形などについて本で調べていた。砂の町というだけあって一番近い狩猟場はアリード砂原。砂が多く、昼は暑く夜は寒い場所である。

逆にロックラックで受注可能な依頼で出向く地で、一番遠い場所に位置するのがスパークル凍土である。

他には、テラス孤島や、ステイプ水没林、アクティ火山などがあるらしい。実際この辺では聞かない地名である。

「よし、決めた！俺はロックラックで一人前のハンターになって見せるんだ！」

覚悟を決めた。

第1章 孤島の彩鳥

★１★

「あづい・・・」

ファムは汗をだらだらと書き、酒場へと向かっていた。見渡す限り、黄色い砂があり、街の向こう側には巨大な何かがあった。乾いた風が砂を飛ばしてくる。その上この街には雨がふらないらしく、農作物は街のはずれの場所で行っているらしい。何よりもとにかく暑かった。

ファムも耐え切れず、頭防具をはずす。その瞬間、自分の顔に砂が叩きつけられる。

街の中心部には、商人たちが1箇所に集まっていた。どうやらここが一番商売をしやすい場所らしい。他の場所だと商品が砂だらけになってしまったため売り物にならない。

奥に行くとも酒場があった。屋根がなく、あるのは側面に砂を防ぐものだけで、ただ単に砂が飛んでこないだけの場所であった。中はガラ開きで、ハンターなど10人に満たない者だった。

実は街にハンターが腰をすえるようになったのは実に1ヶ月前のことらしく、HR10に達しているものはたったの1人だけらしい。

これは移動の際の船長から聞いた話である。

「しかし、ここなら俺も1人前になれるかもしれないぞ！」

暑さに耐え抜き、とりあえずギルドの受付嬢に話しかけると、まずはこちらでハンター登録を行ってくださいと案内された。ファムはその通りにしたがって、ギルドマスターを称する者のところへいった。

見かけとしゃべり方は年老いたおじいさんのようで、身長は低い。そもそも人間には見えなかった。

「お主もこの街を拠点としようとしているハンターかのか？」

「はい、『そうです！』」

ファムは元気に答える。しかし、途中から声が被った。

ファムはとっさに左を見ると、青年が居た。武器は太刀。シンプルなデザインで、鉱石をふんだんに使った鉄刀【神楽】である。防具はガレオスと呼ばれるモンスター素材を使ったガレオスシリーズ。力量はファムの少し上といったところだろう。

「見かけは悪くないのう。ところでどうじゃ？お主ら2人で組んでみないかのう。」

2人が顔を見合わせる。しばらくの間沈黙が流れた。

「じゃあ、1回だけ、組んでみませんか？」

ファムが言い出した。

「ああ、いいさ」

青年は承諾した。

「俺はファム。よろしくな」

「俺はケアル。宜しく頼む」

と、2人はテーブルに座って挨拶を交わす。手元には現在の依頼一覧が書かれている紙があった。

「しかし、一体なんの依頼を受けよう」

「一覧を見るとフィールドの地形を余裕を持って観察できそうな依頼はあいにく無いな」

「しかし、ドスジャギイといい、クルペッコといい・・・聞いたことの無い名前だな」

「どちらも鳥竜種らしいが、やはり初対面だと不安が残るな」

「あーやはりパンだけじゃおなかが減るー」

「それはいいから早く考えてくれ」

一向に受ける依頼が決まらないでいると、1人の少女が声をかけてきた。

「あの？もしよかったら私と同行しませんか？」

ファムとケアルが顔を上げる。そこにいた1人の少女は顔立ちは美

「なら、クルペッコあたりが無難だと」

「クルペッコ？」

「あ、えっと・・・こんなモンスターです」

シャルクは図鑑を開くと、クルペッコの写真を指差した。

長いクチバシの上にはまるでラッパのような形をしたオレンジ色のものがあり、喉かその下あたりの赤い部分を膨らましている。体全体は緑や紫が主な色である。見た感じカラフルである。

「このモンスターは、鳴き真似をして、他の敵をおびきよせるという技を持っているんですよ。ちなみに私の防具もクルペッコの素材でつくられています」

シャルクが身にまもっていた防具はクルペッコシリーズであるようだ。

「ちなみに、この武器は？」

「アイシクルスパイク改です。ドスバギイの素材を使った氷属性の武器です」

「それで、クルペッコに有効な属性は？」

「氷属性が有効です」

「あいにく氷属性の武器は持ってないな」とケアル。

「氷属性はこの武器の1つ前の派生だ」とファム。

「じゃあ、俺はボウガンでいこう」

ケアルが武器の種別を変えた。

「ボウガンも扱えるの？」

と、シャルクはたずねた。俺も初知りだ。

「ああ、ボウガンで狩りをするかもしれないしはあつたんだ」

「じゃあ、決まりですね。明日の10時、ここに来てください」

シャルクは1枚の紙切れに自分の家の番地を書くと、酒場から出て行った。

「じゃあ、俺たちも帰るか」

立ち上がると、2人はギルドマスターに呼ばれた。

「まさかお主らが目をつけられるとは思わなかったのう」
「？」

ファムもケアルも疑問符を浮かべる。

「シャルクのことじゃよ。彼女に目を付けられた者は必ずどこかで何かの才能をはつきするらしいぞい」

「・・・それって。厳しいとか？」

「いいや、彼女は先程の様子から分かるように、優しい心の持ち主じゃよ。指導ではなく、ここじゃ」

ギルドマスターは指差した。

「目？」

「見る目がいいのじゃよ。彼女は何らかの素質がある者以外にはそうそう組もうなんていわないぞい」

* 3 *

夜が明けた。とりあえず引越したばかりなので、1ヶ月は無料で住めることになっている。

狭いことには狭いが、冷たい風が家のなかに入ることには無い。昼の太陽による地熱で暖かいくらいだった。

ケアルは武具を昨日と違う物にしていた。武器は見る限りタンクメイジ、防具はガレオスシリーズだった。

ファムとケアルは近所だったため合流し、シャルクの家へと向かった。

「押すよ？」

ファムはインターホンのボタンを押す。少ししてドアが開いた。

「あ、どうぞ。上がって」

「・・・おじやまします」

ファムとの家とかなり違った。HRが最高100であるため、ここが最高級というわけではないが、それでも、ファムの家よりも広かった。

「あれ？食事は済ませたの？」

「あ、いや、まだです」

「んじゃあ、奥の部屋」

シャルクが案内してくれた部屋に入ると、美味しそうないい匂いがしてきた。

シャルクは机に食事を並べると、それを食べさせてくれた。

『ファミ、気をつけるこういうのは大抵不味いパターンだぜ』

ケアルがファミ耳元で囁く。ファミは、そう言われてもという表情になった。

「いただきます」

「・・・いただきます」

2人は同時にまず肉を口に入れた

「・・・どう？」

シャルクは首を傾げる。2人はしばらく黙り込み、そして目を見合わせて

「うめえ〜」

そう言った途端、2人はガツガツと食事を口の中へ頬張っていく。

その食欲にシャルクは呆気にとられていた。

食事を終わると、一行は酒場へと向かった。

「シャルクさんおはようございます。今日は何のクエストをお受けになりますか？」

受付嬢がシャルクの名前を呼ぶ。割と知られたハンターはこう名前と呼ばれるらしい。

「えっと・・・これで」

シャルクが指差したのは、クルペッコの討伐依頼である。

「目的地はテラス孤島。か、どんな場所なんだろう」

報酬金を見る限り、成功すれば3人でわけてもそこそこの生活ができるだろう。

「狩猟環境・・・不安定？ サブクエストもあるのか」

ケアルといえば別のところへと目を付けていた。

狩猟環境が不安定と書かれている。サブクエストはどうやら成功すると報酬が上乘せされるようである。

シャルクは手続きを終えて、契約金を支払うと、2人を呼ぶ。

「どうしたの？準備できたけど・・・いく？」

ケアルはそれに同意しなかった。

「行くのはいいんだが、ちょっと行動とかは調べておきたいぞ」

「それくらいなら、移動中に説明できますよ」

「うむ。なら行くでしょう」

「そういえば、2人は南アルトルア地方にいたハンターですか？」
船の上でシャルクが尋ねた。

「そうだが・・・そういえばこの辺ではこの武具は珍しいんだな」

「それ、ガレオスシリーズと、クックシリーズですよね？」

シャルクが見事に防具の名前を答えた。

「いろいろと知識については豊富です。そっちの方のモンスターは狩ったことがないんですけど」

するとケアルが返答する。

「なら、こんど余裕があるときにこっちに来てみればいいんじゃないか
いか」

「あー、暇があればの話ですがね」

* 4 *

砂嵐の酷い砂漠上では、砂の上を軽快に移動する船へと乗り込んで、砂漠の果てまで移動した後、岸まで歩いて、船に乗り込みおおよそ半日するとそのテラス孤島へとたどり着いた。

テントは酷く荒れていて、休憩用のベッドがなんとか使える場所であり、近くにはこけの生えた支給品ボックスや納品ボックスがあった。右側には海から続いている池のようなものがあった。拠点にあ

るのはそれだけである。

3人は、持ってきた荷物袋の中身で必要の無いものを取りだしてまとめおいた。

支給品ボックスからは、こんな物がでてきた。

地図、応急薬、携帯食料、ペイントボール、こやし玉、音爆弾、LV1、2通常弾などが出てきた。

「こつち地方の支給品よりも結構充実してるな」
ファムは感心する。

「これは・・・たいまつか？いつ使うんだ」

ケアルが尋ねるとシャルクが説明する。

「それは、洞窟とかの暗い場所に入る時に使うんですよ。あと火の苦手なモンスターを追い払うこともできます」

ケアルは「なるほど・・・」と納得し、そして応急薬と携帯食料をポーチに入れていた。

3人は拠点から出ると、エリア2の比較的広い場所があった。

風景はそのまま孤島であり、大自然が豊富である。草木や川が壊されること無くそのままの状態が残っていた。見渡す限り人工のものは見当たらなかった。

エリア2には、縞のあるのんびりした草食のアプトノスがいた。この場所でも隊列を作り、父母と子が一緒に行動をしていた。

「ここにはいないようだな」

「じゃあ、こつちに行きましょう」

と、シャルクに案内されて向かった先はエリア5。これは2と比べてかなり広がった。

海から流れている海水が、ここまで流れてきていて、1つの川を作り出していた。

「ここもはずれか・・・」

ファムはみたことの無いモンスターと対峙するのが待ちきれなかった。

「こないでくれ」という不安と「はやくこないかな」という期待感

がぶつかりあって、期待感が勝る。

エリア9は縦に長いエリアであり、横には複数の穴があった。どうやら拠点の脇の池のような場所からここまでは繋がっているようである。

エリア10は狭い海岸の奥に水平線の見える広い海があった。果てが見えない。そこには早速見たことのないモンスターの姿が3つあった。

「これはルドロスです。普段は水の中で生活しているんですけど、たまに岸が上がってくるんです」

と、言った瞬間シャルクは片手剣を取り出すと、戦闘にいるルドロスに斬りかかった。

突然の出来事にルドロスは「フグウ」と驚き、そして3体が同時にシャルクに襲い掛かってきた。

それを簡単に回避するとすぐにルドロスの後に立って斬りつけた。

「ようし、俺も」

それをみていたファムも大剣を構えて、後ろを向いているルドロスに攻撃を仕掛けた。

またも不意打ちを食らったルドロスはファムに向き直る。それをケアルが弾で牽制した。

ついに誰を狙えばいいか迷い始めたルドロスに3人は奇襲を仕掛ける。3体はそのまま地面へと崩れ落ちる。

「さて、次はどこに行けばいいんだ」

ファムはシャルクに問いかけた時、彼女は突然に走り出そうとし、そして

「上ー!」

と知らせた。

ファムとケアルは上をみた途端、急に太陽の光が遮られ影が現れる。

「あれは・・・」

体は緑や紫や橙といったような色に染められて、クチバシが特徴的な鳥竜種がゆっくりと下に下りてくる最中だった。

「クルペッコか！」

ファムとケアルはその場から退く。しかしシャルクは逆にクルペッコへ向かって走り出し、そして剣を抜いて、飛んだ。

「な」

突然攻撃されたクルペッコは驚いて下に落下する。

「どりゃああああっ！」

チャンスを見逃さなかったファムは大剣でクルペッコに攻撃をする。ケアルも間合いを取ってボウガンを構え、弾を装填しクルペッコの頭目掛けて撃った。

クルペッコはようやく起き上がると、とりあえず自分のまわりの者を飛ばそうとその場で回転を始めた。

「あぶなっ」

ずっと斬りこんでいたファムは突然の攻撃に大剣で防御をする。それほど脅威な物ではなかったので大きなダメージは無かった。

シャルクといえはいつの間にか間合いをとって難なく攻撃を回避していた。

ファムが体制を崩すと今度はケアルが弾を撃つ。クルペッコに当たることなく目の前を通過したそれにクルペッコが気をとられる。

シャルクはその隙を見逃さずに剣でクルペッコを斬る。武器が斬るたびに氷の結晶を撒き散らした。

ファムももう一度剣を抜き、そのクルペッコに遅れて斬りかかる。

しかしクルペッコはもう別の行動に移っており、シャルクに向かってクチバシで攻撃を仕掛けていた。

シャルクはそれを楽々と回避するが、もう振り下ろし始めていたファムの剣は空を斬って、地面に叩き付けられた。

「くそぉ」

ファムは負けじとクルペッコに一歩近づき剣を横に振り回す。それはクルペッコの尻尾にギリギリで命中する。

クルペッコはファムに向き直ると、2つの手を「カチカチ」と鳴らしはじめた。

「？」

危機感を感じファムはとりあえず大剣でガードの体制をとると、クルペッコはファムに向かって跳んでくる。

そして、ファムの目の前まで跳んできたその瞬間にクルペッコは手を叩いた。

「熱っ！」

その瞬間、クルペッコの手から大きな火がでて、防具や髪を焦がした。

幸い海の水があふれていた為、火はすぐに消えた。

「こんなこともできるのか・・・」

ケアルは通常弾をクルペッコの体へ放つと、こんどはファムからケアルへと狙いを変えた。

その瞬間、今度はシャルクが片手剣で後ろから攻撃を仕掛ける。

ついに、どれを狙うかを迷い始めたクルペッコは隙をなくすために空へと飛び始めた。

シャルクがポーチからペイントボールを取り出すと、それをクルペッコへと投げつけた。

クルペッコは空高く飛び上がると、別のエリアへと逃げていった。

そして、ペイントボールの匂いは移動を続け、やがてエリア5の上空で匂いの動きが止まった。

3人はエリア9を通ってエリア5へと向かうと、ゆっくりとクルペッコが降りてくる最中だった。

もう既にこちらの存在には気付いており、降りた瞬間3人目指して走ってきた。

3人は散開し、ケアルが間合いをとる。

クルペッコがファムの方へ向くと、ケアルとシャルクが攻撃を仕掛けクルペッコの狙いをひきつける等して、初めて組むパーティーとはいえある程度の連携も取れていた。

「オオツオオツ、オオオオオ」

突然鳴き始める。しかし、それは最初に聞いた時と全く違う泣き声

だった。

「これが鳴き真似か!？」

ケアルクが言う。少しすると、ランポスのような小型のモンスターが突然現れた。

「あれはジャギイです!」

シャルクが注意を促す。

「邪魔だなあ」

ファムは狙いをクルペッコからジャギイへと変更し、そして大剣を振るう。

全体重を乗せた攻撃にジャギイはあえなく吹き飛ばされ1撃で息を引き止めた。

他の2体は小回りの効く片手剣でシャルクが相手をしていた。こちらも威力は大剣に劣るが数回斬れば倒すことができた。

ジャギイを追い払った後、また狙いをクルペッコへと戻し、そして順調にダメージを与えていく。

「これならいける!」

確信した瞬間、今度はまたクルペッコが鳴き真似をしてみせた。

「グガアアアアアアアアアア」

「何が呼ばれたって結果は同じさ!」

ファムは気を緩めてしまう。しかしその油断が結果として大変な結果を招くことになるのが多い。

「どりゃあああああ!」

周りも気にせずにファムは斬り込む。その終わらない攻撃にクルペッコは数回怯み、動けない状態だった。

「あぶないっ!」

微かだが誰かの声があった。その瞬間、シャルクがファムへ近づいて右腕でファムを引っ張った。

「なにするん・・・っ!」

ファムが見て取れたのは、緑色の巨体が突進してきて、シャルクがそれを盾で受け流したところまでだった。

2人はそのまま横に倒れる。状況を理解したらしいケアルが閃光玉を投げる。

シャルクは起き上がり、ファムに声をかけた。

「大丈夫？」

「あ……はい」

「ちゃんと周りを見ないと」

ファムは状況を理解する為に周りを見渡す。

そこには、目を眩ませているクルペッコの姿と、もう一つファムが知っているモンスターがそこにいた。

「リ、リオレイア！？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2767j/>

モンスターハンター 砂海の狩人

2010年10月9日23時36分発行